

## 社会心理学における自由意思をめぐる問題 I

—2009年SPSP年次大会での討論を手がかりに—

森 津 太 子<sup>1)</sup>

## Arguments over free will in social psychology I

—Based on the debate in SPSP2009—

Tsutako MORI

### 要 旨

近年、自由意思に関する関心が心理学者、とりわけ社会心理学者において高まっている。しかし研究者間の見解の相違は大きく、何が争点であるのかも明確ではないのが現状である。そこで本稿では、2009年に開催されたSociety for Personality and Social Psychologyの年次大会の中で行われた二人の著名な社会心理学者（John A. BarghとRoy F. Baumeister）による自由意思の存在をめぐる討論と、それに関連する論考に着目し、社会心理学における自由意思の問題について考察を行った。自由意思の存在を肯定するBaumeisterと、その存在を懐疑的に見ているBarghは、興味深いことに、いずれも進化心理学的な観点からこの問題を捉えようとしていた。しかし、Baumeisterは自由意思を進化的適応の産物と見なし、自由意思こそが人間が文化を営む上で必須のものだと考えているのに対し、Barghは自由意思の存在を否定し、そのような“何ものによっても引き起こされない行為の原因”を仮定することは非科学的だと主張している。彼は、無意識的過程こそが進化的適応の産物であり、意思すらも自動化されたものだと主張する。彼によれば、意思とは「遺伝的に継承されたものと、幼少期に吸収した文化的規範や価値観と、個人の人生経験の合流点」なのである。二人はまた、自由意思を信じることの心理学的意味においても意見を違えており、Baumeisterが自由意思を信じることには心理学的な効用があると考えているのに対し、Barghはそのような効用は限定的で、時には有害にすらなると反論する。このように、彼らの見解は平行線を辿り、最後まで一致を見ることはなかったが、彼らの討論の内容を吟味することにより、社会心理学における自由意思をめぐる問題の重要なポイントが何なのかが明確になった。

### ABSTRACT

Recently, the interest on free will has been growing among psychologists, especially among social psychologists. However, there is a big divergence in views of free will among researchers. This article focused the debate on free will, which was held at the annual conference of Society for Personality and Social Psychology in 2009, among two prominent social psychologists — John A. Bargh and Roy F. Baumeister. Based on their arguments in the debate and relating articles, this article discussed what the point of the issues on free will in social psychology is. Baumeister was a representative for social psychologists believing in free will, and Bargh was a representative for skeptics for that. Interestingly, both of them accepted the idea of evolutionary psychology. However, while Baumeister saw the free will as the product of evolutionary adaptation and essential for human beings to creating cultures, Bargh denied the free will, claiming that it was not scientific to assume “uncaused causer”. He saw the unconscious automatic processes as the product of evolutionary adaptation and insisted that even the will is automated. He said the will is “confluence of genetic heritage, early absorption of local cultural norms and values, and particular individual life experiences”. They also held different opinions regarding psychological meanings of believing in free will. While Baumeister insisted the psychological benefits of believing in free will, Bargh claimed such benefits were limited and sometimes believing in free will was harmful. Although their claims never met, the critical points of arguments over free will in social psychology have been clarified through examination of this debate.

<sup>1)</sup> 放送大学准教授（「心理と教育」コース）

## 社会心理学と自由意思

人間の心を研究対象とし、哲学を学問の祖とする心理学において、自由意思の問題は、少なくともその初期においては極めて重要な問題だった。しかし研究の方法論を自然科学に求め、サイエンスとしての心理学を志向する傾向が強まる中で、客観的な測定の対象にはなりえない自由意思の問題は、心理学には手に負えないものとなっていった。実際、アメリカ心理学の父と言われるWilliam Jamesは、自由意思の問題に強い関心を抱いていたが、その著書の中で「実は自由意思の問題は厳密に心理学的基盤に立っては解決できないのである」(James, 1890)と断定し、晩年は研究の基軸を哲学に移している。

しかし人間の心を研究対象とする学問として、自由意思にまつわる問題を無視することは、人間にとって最も本質的とも言える問題を回避するということであり、他方で心理学は、常にこのことに後ろめたさを抱え続けてきたように思われる。行動主義の衰退後、認知革命が起きて、心理学の中で自由意思の問題を真正面から見据える研究はほとんど出てこなかったが、20世紀の終わりから21世紀の初めにかけて、新しい世紀の最大の科学的課題は、意識あるいは自由意思の解明だというスローガンが哲学や脳科学をはじめとするさまざまな学問領域で頻りに聞かれるようになる中で、ようやく自由意思の問題について、積極的に意見する心理学者も増えてきた。

興味深いことに、現在、数ある心理学領域の中で特に自由意思の問題について、積極的な意見を述べようとしているのが、社会心理学の研究者である。社会心理学は、心理学の一領域として、自由意思の問題に関し、一方では一般的な心理学と歩みを共にしてきたが、他方では社会心理学に固有の事情から異なる道を辿ってきた。そうした固有の事情が、社会心理学者を、意識や自由意思の問題に関心を向けさせているのではないかと考えられる。

それは一つには、社会心理学は、人間の判断や行動に及ぼすさまざまな要因を探求する中で、他の心理学領域よりも外的な要因により注意を向けてきたということである。多くの場合、心理学者の主たる関心は、内的な要因、すなわち行為主の性格、能力、意図、感情といった心的要素が、人間の判断や行動に及ぼす影響を探求することである。しかし、人間の判断や行動は、このような内的要因だけではなく、外的要因、すなわち行為主を取り巻く環境や状況にも影響されており、社会心理学では、伝統的に、この外的要因がもたらす影響の大きさに関心が注がれてきた。Solomon Aschの同調の実験、Stanley Milgramの権威への服従の実験など、社会心理学のテキストに必ず紹介される初期の研究の数々は、当事者を取り巻く環境が、彼らの判断や行動に強力な影響を与えることを示している。すなわちこれらの研究は、明示的ではないにせ

よ、人間の判断や行動が当事者の関知しない要因によって左右される可能性を示唆しているといえ、社会心理学が早い段階から、人間の判断や行動が必ずしも自由意思に基づくものではないことを、間接的に示してきたと言える。後に紹介するBarghの自動性の研究は、行為主の意識的関与なしに、環境が心的過程（無意識的過程）を誘発し、判断や行動を導くことを強調している。その意味で、社会心理学の伝統的な研究の系譜を継ぐものと位置づけられる。

もう一つ指摘すべき社会心理学に固有の事情として、社会心理学で扱う判断や行動が、たとえば認知心理学や発達心理学と比べ、かなり高次かつ現実的な問題に関わりが深いものであることが挙げられる。上述のように、社会心理学は、他の心理学領域に比べれば、外的要因を重視する学問領域である。しかし心理学の一領域として、心のしくみ（内的要因）から、人間が行う判断や行動を説明するという側面も持ち合わせており（唐沢, 2012）、多くの場合、外的要因と内的要因との相互作用によって、人間の判断や行動が規定されるという立場をとっている。また高次で実生活に密接に関係した判断や行動を研究対象とする以上、仮定される心のしくみはそれ自体、複雑で高次なものにならざるを得ず、それらがもたらす結果は、時に我々の人生を左右するような重要なものとなる。であるならば、そのような判断や行動が当事人の意思とは完全に無関係なはずがないし、自分の人生は自分の支配下にあるはずだ。上述の議論とは一見、矛盾するが、複雑な人間の判断や行動を研究対象とする社会心理学では、一方ではこのような素朴な信念が維持されてきたように思う。知覚や運動といった、比較的低次の活動に関わる心のしくみが、当事者に自覚されることなく働いているということは受け入れやすいが、他者をどのように認知するか（対人認知）とか、出来事の原因を何とみなすか（原因帰属）とか、自分自身を価値ある人間とみなすか否か（自尊感情）といった社会心理学の主要なトピックにかかわる現象が、当事者の意識や意図と無関係に起きているというのは、社会心理学者であれ、容易には受け入れがたいことである。実際、最近まで、上記のような現象の背後にある心のしくみが、無意識的な過程として働くという可能性については検討すらされてこなかった。先に、Barghの自動性の研究は伝統的な社会心理学研究の系譜に位置づけられると指摘したが、にもかかわらず、彼の研究が驚きとインパクトをもって社会心理学者に受け入れられたのは、人間の判断や行動が当事者の自由意思とは無関係に生じる可能性があることを、初めて直接的に示して見せたからだろう。

このように考えてみると、社会心理学においては、一方では自由意思の存在を暗に否定しつつも、他方では自由意思の存在を仮定するという、相矛盾した立場が交錯した状態のまま研究が進められてきたと言える。あるいは、こうした矛盾に気がついた者は、おそらくこれまでもいたであろうが、あまりに大きな問

題ゆえに、それに真正面から取り組むことなく、今日までやり過ぎてきたのではないだろうか。それに対し、20世紀終盤に台頭しはじめたBarghの自動性研究は、人間の判断や行動の多くが、それがいかに高次なものであろうと、自動的・無意識的な過程によって大きく左右されている可能性を多くの実証研究を用いて説得的に示したし、時同じくして、認知科学、脳科学等、他の隣接科学でも意識の問題への関心が高まったことで、いよいよ社会心理学者も、自由意思の問題について、明確な立場をとらざるを得なくなってきた。現在は、著者も含め、個々の社会心理学者が、この自由意思の問題にどのような立場をとり、それをどのように自身の研究の中に生かしていくかが求められている時期だと思われる。

ただし、現状では、まだその論点すら未整理のままである。そこで本稿では、2009年にアメリカのフロリダ州タンパで開催されたSociety for Personality and Social Psychologyの年次大会（第10回大会）で企画された自由意思に関するシンポジウムでの二人の著名な社会心理学者によるスピーチと、その前後に両者が公的な場で行った発言を手がかりに、社会心理学における自由意思をめぐる問題について、論点の整理を試みたい。

## SPSPの年次大会

今回取り上げるシンポジウムを主催したSociety for Personality and Social Psychology（以下、SPSP）は、パーソナリティ心理学者と社会心理学者からなる学会である。現在のところ、この分野の国際学会としては最も規模が大きく、活発な学会活動を行っている。たとえば直近の年次大会（2012年1月カリフォルニア州サンディエゴで開催された第13回大会）では、世界各国から約4,000名の研究者が集まり、75のシンポジウムと約2,100のポスター発表が行われた。

数多くのシンポジウムのうち、学会の準備委員会が企画するシンポジウムでは、この分野をリードする研究者がホットな話題のスピーチを行い、注目を集めることが多い。なかでも自由意思の問題を真正面から取り上げた2009年大会の企画は、例年以上に大きな話題となり、大会閉幕後も学会内外で舌戦が繰り広げられた。当該の企画は、「社会心理学が‘自由意思’の問題について言えること（What social psychology can tell us about the ‘free will’ question）」と題されたSpecial Keynote Sessionで、Constantine Sedikides（University of Southampton）による座長のもと、John A. Bargh（Yale University）と、Roy F. Baumeister（Florida State University）という、社会心理学界において、とりわけ著名な研究者二人が、自由意思をめぐる自らの見解についてスピーチをした。彼らのスピーチの要旨はその後、彼ら自身によって、SPSPが発行するニューズレター Dialogueに寄稿されたが、両者の討論はそれに留まらず、その後、場外乱闘の様相を

呈していった。Psychology Todayという一般向けの心理学雑誌のウェブサイトにも、専門家の立場でブログを掲載している両者は、自分のブログに相手の主張への反論を掲載し、それによって公開討論というかたちになったために、彼らの主張にコメントする専門家や読者など、多くの人々を巻き込んだ議論へと発展したのである。

## 二人のスピーカー

ここで簡単に二人のスピーカーを紹介する。まずBarghは、「オートマテシテティ（自動性）革命」（池上, 2001）とでも呼ぶべき一大革命を社会心理学にもたらした時代の寵児とも言える存在で、1990年代以降の社会心理学（特に社会的認知）は彼を中心に発展してきたといっても過言ではない。彼は主に、プライミングという認知心理学の中で開発された手法を社会心理学的事象に援用することで、人間の判断や行動、あるいはそれに先行する認知、感情、動機づけといったあらゆる心的側面が、環境内の刺激によって、自動的に（当事者の意識的関与なしに）発動することを次々と例証してきた。これを自動性研究という。高次のものも含め、人間の判断や行動の大部分を無意識的過程が担うことができると仮定する以上、Barghにとって、自由意思はとるにたりないものである。したがって、彼が自由意思の存在を否定する立場のスピーカーとして、今回のシンポジウムの演壇に立ったことは誰の目にも明らかだった。

一方のBaumeisterは、長年、社会心理学界を牽引してきた研究者の一人として、幅広い分野の研究を行っている。それらの一つ一つ説明することは難しいが、総じて自己の問題に関する関心が高く、最近は特に自己制御の研究に精力を注いでいる。自己制御とは、規範や理想、目標などにしたがって、自らの行動を律したり、変化させたりすることであり、そこでは半ば必然的に自己制御を行う行為者の自由意思を仮定せざるをえない。すなわちBaumeisterは、Barghとは反対に、自由意思を肯定する立場として演壇に立ったわけである。彼はまた、社会心理学者という立場を越え、心理学を代表する研究者の一人として、自由意思にまつわる論文をまとめた書籍（後述）の編纂に関わるなど、近年、積極的にこの問題に関与している。その意味でも、Barghの論敵として、これ以上ない人選だったと考えられる。

実はこの二人は、SPSPで討論が開かれる前にも、何度か別の場所で相まみえている。一つは、雑誌“Perspectives on Psychological Science”の2008年の特集号「哲学的思考から心理学的経験主義まで（From Philosophical Thinking to Psychological Empiricism）」でのことであり、Baumeisterは「科学的心理学における自由意思（Free Will in Scientific Psychology）」という題名で、心理学という学問領域において自由意思を研究する意義について議論しているのに対し

(Baumeister, 2008a)、Barghは「無意識的な心 (The Unconscious Mind)」という題名の論文で、これまでの心理学の中で構築されてきたモデルがいずれも意識中心のもので無意識を軽んじていたことを批判している (Bargh & Morsella, 2008)。また同じく2008年に出版され、Baumeisterが編者の一人を務めた「我々は自由なのか? : 心理学と自由意思 (Are We Free?: Psychology and Free Will)」という題名の書籍 (Baer, Kaufman, & Baumeister, 2008) では、Baumeisterは「自由意思、意識、そして文化的動物 (Free Will, Consciousness, and Cultural Animals)」という題名の論文で、自由意思や意識が人間に特有の心のしくみで、これらが存在することで文化が構築できたと主張しているのに対し (Baumeister, 2008b)、Barghは「自由意思は不自然である (Free Will is Un-natural)」という題名の論文で、科学的研究において自由意思を仮定することは、それ自体、不自然なことだと主張している (Bargh, 2008)。

SPSPでのスピーチは、これらの論文で示されたそれぞれの主張の延長線上のものである。ただし、上記の雑誌ないし書籍で持論を展開している研究者は、BarghとBaumeisterだけでなく、彼らはあくまでも多くの研究者の一部として参加したに過ぎなかったし、それぞれが独自に自らの意見を寄稿しただけで、特定のターゲットに向けたものではなかった。したがって二人が公式の場で直接的に自由意思に関する意見を戦わせたのは、SPSPのシンポジウムが初めてのこととなる。本稿ではこれ以降、SPSP時の両者のやりとりを中心にしつつも、前哨戦とも言える上記の論文での議論や、SPSP後に主にウェブ上で繰り広げられた議論 (Bargh, 2009; Bargh & Earp, 2009a, 2009b; Baumeister, 2009a, 2009b, 2009c, 2009d, Baumeister & Vohs, 2009) を適宜、参照し、両者の考えを整理していきたい。まずは両者の主張の概要をそれぞれまとめたと、二人の主張の違いはどこにあり、それはなぜなのかを考えていくことにする。

## 両者の主張の大意

### 1. Barghの主張

Barghのスピーチの題目は、「自由意思ということにおける“自由”とは実際のところ何を意味するのか (What does the ‘free’ in ‘free will’ really mean?)」というものであった。彼の主張の大意は次のようなものである。

Barghによれば、自由意思ということにおける“自由”とは、因果性からの自由であり、それは外的な圧力にも、内的な圧力にも影響されない、行為の源があることを意味している。しかしこの“何ものによっても引き起こされない行為の原因 (uncaused causer)”は、魂 (soul) とでも呼ぶしかない、たぶん神秘的な存在であり<sup>1</sup>、一科学者としてBarghはそのような存在を疑問視する。

また、Baumeisterを含む一部の研究者は、人間の判断や行動が、実験操作などによって100%規定されるわけではないことを、自由意思が存在することの傍証としている。しかしBarghは、そのようなやり方は間違っていると言う。人間の判断や行動を予測する際、既知の知見だけで説明できない部分 (誤差分散) が存在するならば、それを科学的に説明しようと努力するのが、自分たち科学者の仕事であると彼は考える。実際、社会心理学は、これまで人間の判断や行動に影響する様々な要因を実証的に明らかにすることに精力を注いできた。したがって、ある判断や行動の原因が、現行の知識だけでは説明できないからといって、その原因を安易に神秘的な (非科学的な) 原因 (すなわち、自由意思) に求めるのは一種の職務怠慢だというのが彼の主張である。人間の行動の中には、もしかしたらその原因として自由意思を仮定できるものがあるかもしれないが、そう結論づけるのは時期尚早で、まずはこれまでと同様に科学的な原因探求に力を注ぐべきだと説くのである。

他方、彼は自ら蓄積してきた自動性の研究を参照しながら、高次の心的過程であっても、それが意識的過程であると仮定する必要はないとしている。既述のように、Barghは主にプライミングという手法を用いて、人間の判断や行動、あるいはそれに先行する認知、感情、動機づけといったあらゆる心的側面が、環境内の些細な刺激によって、当事者の意識的な関与なしに、自動的に発動することを実証的に示してきた。社会心理学者の多くが、特別な実証研究をするまでもなく、当然のこととして、意識が関与するものと仮定してきた高次の心的過程の数々が、実際には当事者の意識的関与なしに作動する自動的過程であることを、具体的な実験結果をもとに示したのである。実質的に彼が切り開いたとも言えるこの自動性研究は、最初こそ異端視されていたが、Barghやその弟子たちは、そのような反対の立場の意見をねじ伏せるかのように、極めて多くの研究を精力的に行い、次々と公表していった。そしていまや社会心理学の主流ともいってよい立場を確保している。その意味では、Barghらの研究は、社会心理学における人間観を一転させたのであり、池上 (2001) が言うように、これは一種の革命的なできごと (オートマティシティ (自動性) 革命) だったと考えられる。Barghは、一連の研究を通じて、人間の日常的な活動の99.44%は、行為者の意識的関与を伴わない自動的過程を通じて生起しているとまで主張している (Bargh, 1997)。そのような立場を貫くBarghにとって、自由意思は存在しないもの、あるいは存在したとしても、極めて限定的な役割を担うに過ぎないのであり、むしろ行為者の意識的関与がなくとも働く自動的過程こそが、社会心理学者が研究すべき対象ということになる。

### 2. Baumeisterの主張

他方、Baumeisterは、「自由意思、意識、そして人

間の社会的生活 (Free will, consciousness, and human social life)」という題目のもと、自由意思を積極的に研究する必要性を訴える。彼自身が目指すのは、自由意思という概念に結びつく心理学的な現実と、そのプロセスに関する研究である。すなわち、少なくとも一般の人の多くが、自らの行動に自由意思が関与していると信じている以上、心理学者として、この現象を追求すべきというのが、Baumeisterの立場である。それは、Barghらの自動性の研究や、他の学問領域の研究 (たとえば、自由意思に関する論争の火付け役となった Libet, Gleason, Wright, & Pearl (1983) など) が、自由意思の存在そのものを疑問視していることとはまったく別話である。仮に科学的に自由意思が存在していないことが実証されることがあったとしても、それならば“なぜ人は (存在もしない) 自由意思の存在を信じるのか”、また“自由意思の存在を信じることにどのような心理学的な意味があるのか”を研究することが重要だと、Baumeisterは考えるのである。

しかし他方で、Baumeisterは、極めて熱心な自由意思の信者であり、自由意思の存在こそが、人間を人間たらしめているのだと主張する。人間は他の動物から進化し、いまなお動物ではある。しかし人間には明らかに他の動物とは異なる側面があり、その最たるものが、言語、技術、科学、道徳、宗教、法制度、教育機関、民主的な政府、ニュースメディアなど、他の動物には到底、つくり得ない高度な文化を生み出すことだと言う。そして、このような高度な文化を生み出すには、本能や環境によって自動的に誘発される行動に打ち勝って自己統制をしたり、理性的な選択をしたりすることが必要であり、それには自由意思が不可欠だと Baumeisterは考える。

このように Baumeisterは、自由意思の存在を個人としては強く信じつつも、心理学者が取り組むべき課題は自由意思の存否を検証することではなく、人が自由意思の存在についてどのように考え、それがどのような帰結をもたらすかということだと主張する。なぜなら、自由意思の存否を議論するには、自由意思とはそもそも何なのかという概念の定義から始めるべきだし、そうした概念定義は、哲学者が長きにわたって取り組んできたことがらであるにもかかわらず、いまだ解決されていない問題だからだ。心理学者が一朝一夕で対応できるものではない。一方、心理学者は、事象の因果性を、具体的なデータによって実証的に示すことでその専門性を発揮してきた。しかし、実験によって自由意思の存否を確認することは容易ではない。高次の心理学的現象が無意識的過程によって生起しているという事実がいくら蓄積されたとしても、それは自由意思の存在を否定することにならない<sup>2</sup>。また Baumeisterは、高次の心理学的現象が無意識的過程によって生起していることを示す研究それ自体も、実際には確率論に負っており、その結果をもって、特定の心理学的事象が必ず無意識的な過程によって引き起こされるとするのは言い過ぎだと主張する。心理学の

実験は、原因と考えられる要因を実験的に操作することによって、結果が影響を受けるかどうかを調べるが、そこで検証されるのは、原因の操作によって結果に統計的に意味のある変化が見られるかどうかであり、結果に変化が見られたとしても、その変化のすべてを操作された原因に帰することはできない。たとえば、知覚者の気がつかない特定の状況変数 (外的要因) を操作することによって、知覚者の行為が変化したとしても、その変化を状況変数だけで説明できないのであれば、そこに自由意思が関与していたことを否定できないというのが Baumeisterの主張のようだ。この主張に対する Barghの反論はすでに示したとおりである。

### 自由意思の存在を信じることの 社会心理学的意味

今回の議論は、もともとは自由意思の存否をめぐるものであった。しかし Baumeisterが、個人の意見としては自由意思の存在を肯定しつつも、(社会) 心理学者が検証すべきは自由意思の存否ではなく、人が自由意思の存在についてどのように考え、それがどのような帰結をもたらすかということだという主張に徹したことで、両者の議論は徐々に脱線をしていく。ただし、自由意思の存在を信じることもたらす社会心理学的な意味についての両者の主張は、かえって二人の無意識と自由意思に対する考え方を浮き彫りにしたように思われる。以下、この点に着目して、議論を整理する。

#### 1. Baumeisterの主張

Baumeisterは、自由意思を否定することは決定論を信じることと等価であり、それは単に「物事には因果がある」ということ以上の意味を含むという<sup>3</sup>。すなわち、それは因果の不可避性を信じることであり、現実に起きることは、起きうる唯一のことだと信じることなのである。世界は巨大な機械のようなもので、厳格な規則に従いながら動いている。そして、我々人間もその一部に過ぎないといった考えだ。したがって決定論者にとっては、我々が行う“選択”はすべて幻想に過ぎないことになる。本来、選択とは、複数のオプションの中から一つを選ぶということであり、それは複数の結果が起りうることを意味する。しかし、決定論が正しければ、たとえ選択者に自らの自由意思で選択をしたという主観的な経験があったとしても、これは単に選択者がある帰結が必ず生じること (あるいは別の帰結は絶対に起り得ないこと) に気がついていないだけで、実際には何が選択されるかはあらかじめ決まっているということになるだろう。

もしそうなのだとしたら、なぜ多くの人が自由意思の存在を信じているのかと、Baumeisterは問う。もちろん信じている人が多いからといってそれが自由意思が存在するという根拠にはならない。しかし、自由

意思が幻想なら、なぜ人は選択の際に激しく苦悶するのか、なぜ自らが決断をする権利を強く希求するのか、なぜそのような自由を求めて、政治的、経済的、社会的に戦うのだろうか。また、社会心理学においては、当人に選択の自由がある感じられる場合と、ないと感じられる場合では、認知や行動の帰結が大きく異なることが繰り返し示されてきた。たとえば、自らの意思で選択したと見なせる場合のほうが認知的不協和を解消する圧力は高まるし (Linder, Cooper, & Jones, 1967)、心理的リアクタンスは、人が選択の自由を外部から脅かされた時に生じる (Brehm, 1966)。このような違いはなぜ生まれるのだろうか。

さらにBaumeisterは、最近報告されたVohs & Schooler (2008)の研究知見を引用し、自由意思が人間にとって不可欠なものであることの間接的証拠であると主張している。この研究は、実験参加者に自由意思の存在を否定する書籍<sup>4</sup>の一節を読ませるなどして、自由意思への信念を低下させると、計算問題の課題でカンニングをするなど、不正な行動が増えるというものである。このような知見は、自由意思を、人間が文化を創造し、他者と円滑な社会的生活を営むために不可欠なものとする彼の考えに合致するものであると、Baumeisterは言う。彼は自身の主張を堅固なものとするために、後に自らも同様の実験を行い、自由意思への信念を低下させると、攻撃性が増したり、援助行動が減ったりすることを示している (Baumeister, Masicampo, & DeWall, 2009)。

また人は、少なくとも主観的には、自らの意思で選択した行為と、外的な力などにより強制された行為とを区別することができ、そのように区別された2つの行為が導かれる内的なプロセスは互いに異なるものであることも指摘する。Baumeisterによれば、自らの意思で選択する行為とは、自己制御 (self-control)、理性的、知的な選択 (rational, intelligent choice)、計画 (planning)、主導権 (initiative) であり、これらはいずれも“意思の力 (will power)” とでも呼ぶべき、共通の心的資源を利用しているという。

これらのことを根拠にして、Baumeisterが繰り返し主張するのは、(社会)心理学にとって、人が自らの意思で選択ができると信じることは、自由意思の存否や決定論の確からしさよりもずっと意味があることであり、人間にとって極めて基本的なことだということである。既述のように、Barghにとっては、ある判断や行動の原因が、現行の知識だけでは説明できないからといって、その原因を安易に自由意思に帰するということが、社会心理学者にとっての職務怠慢だった。しかしBaumeisterにとっては、自由意思による選択をすべて幻想として片付け、自由意思の存在を信じることの社会心理学的意味について顧みないことこそが、社会心理学者としての職務怠慢なのである。

## 2. Barghの主張

上記のようなBaumeisterの主張に対し、Barghも、

人間が自らを取り巻く世界や自分自身の行動をコントロールできるという感覚を好むという点では合意し、それ自体は人間の持つ正常な機能だと答えている。ただしそれはBaumeisterが指摘するまでもなく、社会心理学において、何十年も前に明らかにされたことだと水を差している。たとえば、Selley E. Taylor (Taylor, 1989) によれば、人にはポジティブ幻想 (positive illusion) と呼ばれる思考傾向があり、その一つとして、自分の判断や行動を現実以上に自由にコントロールできると信じやすいことが知られているし、こうした信念には心理的健康を高める機能があることが明らかにされている。しかし、仮に自由意思や選択の自由を信じることにメリットがあるとしても、それは自由意思が実際に存在するということとは無関係だと繰り返す。

またBarghは、Baumeisterが、自由意思への信念を揺るがす文章への接触が非道徳的な行動を促すというVohs & Schooler (2008)の研究知見を強調したことを受け、そのような研究知見をもとに、自由意思の存在を否定する研究知見を一般の人に知らせないようにすべきだとか、自由意思の存否を実証する研究を止めてしまうべきだといった結論を引き出さないように、強く注意を促している。これはBargh側のやや過剰な反応にも見える。しかし過去30年近くにわたって、従来は自由意思によるものと考えられてきた判断や行動の多くが無意識的な過程によって支えられていることを実証してきた研究者として、自由意思を信じることをだけは是とするBaumeisterの主張に我慢ならなかったのだろう。その証拠に、Barghはのちに、むしろ自由意思の限界を一般の人に知らせることが有効な場合があることを、小学生と成人を対象に行った自らの研究 (Harris, Bargh, & Brownell, 2009) を引き合いに出して反論を行っている。これは、番組視聴の間にさりげなく挟み込まれた食べ物の広告が、当人が気づかないうちに、食行動を促進することを示したもので、もし多くの人が自分の行動を決めることができるのは、自分だけだと信じていたら、簡単にマーケッターや広告主の餌食になってしまう。したがって、一般の人々に対し、彼らの行動に影響を与えようとしている人々がいることを知らせるためには、こうした研究を精力的に行い、その結果をできるだけ多くの人に公表していくことも重要だとBarghは訴える。

またBarghは、自由意思への信念は、それぞれの人の現象学的な経験に根ざしているのも、仮にそれを否定する研究知見を知ることになっても、その信念自体は容易に揺らぐものではないという。実際、コペルニクスが地動説を主張し、それが受け入れられた後も、我々は主観的には地球が動いているのではなく、太陽が昇ったり、沈んだりしていると感じているし、進化論のアイデアが多くの人に知られるようになって以降、進化論を支持する証拠は無数に蓄積されているのに、キリスト教信者の創造主の存在に対する信念は揺るがされていない。したがって、判断や行動が当人の

自由意思以外の原因から引き起こされることを示唆する研究が紹介されたからといって、そのために、即、社会的な規範や道徳的行動が崩壊してしまうというのは杞憂に過ぎないと Bargh は主張するのである。

さらに Bargh は、我々は常に自由意思を信じているのではなく、自由意思への信念は選択的であることを指摘する。これまで数多くの社会心理学的研究が示してきたように、人は善行や成功は自分の手柄（すなわち自由意思で選択したこと）と考えるが、悪行や失敗は自分の責任にしないという、セルフ・サービング的な原因帰属をする。また、我々は常に自由意思で選択したもののみを重要視するのではなく、自分で選んだり、自分がコントロールしたりすることができないものにも誇りを持っている。たとえば、名前は自らが選択したものではないが、それに誇りを持っているし（ネーム・レター効果）、20 答法を行ったときに最初のほうに出てくる記述の 3 分の 1 は自らの意思では選択できない自己の側面である。このように考えると、Baumeister が指摘するように人間には常に自らの意思で選択をするという信念があることが重要なわけではなく、むしろそのような信念は自尊感情を維持する手段として、戦略的に利用されているにすぎないと Bargh は主張するのである<sup>5</sup>。

### 両者の主張はどこが異なるのか

ここまで、SPSP での二人のスピーチと、その前後に論文、ブログなど、さまざまな媒体によって公表された二人の論考をもとに、両者の主張を概観してきた。両者のやりとりは、公にされているものだけでも、SPSP 終了後、約半年ほど続き、ここでは紹介をしていないものの、何人かの研究者がこの論戦に参加した。しかし、結局、最後まで両者の主張の溝は埋まらなかったように見える。それはなぜだろうか。

Baumeister は両者の見解の相違を、自由意思もしくはそれと関係が深い決定論の概念定義の相違と考えているようである。Baumeister にとって、自由意思を否定することは決定論すなわち、あらゆる人間の判断や行動が、それが起きる以前に一義的に決定されているばかりでなく、世界のすべての事象が一つの因果性の中にあると認めることである。そこには偶然が関与する余地もなく、すべての事象が必然である。逆に言えば、偶然性が関与する世界は、結果が一義的に決定される世界ではないため、自由意思が関与する余地があると Baumeister は考える。一方 Bargh にとって、自由意思を肯定することは、因果性を否定することであり、人間の判断や行動の中に原因が特定されないものがあること、あるいは科学的には検証できない神秘的な行動の源があることを認めることである。しかもこの行動の源は、行動の原因にはなり得ても、それ自体が何ものかによって導かれることはないもの（uncaused causer）なのである。Bargh は科学者としてこのような考え方は不自然だと一蹴し、我々が自由意思

と考えるものも実際には別の何かによって導かれたものであり、その意味で他の事象から完全に“自由な”意思は存在しないと主張する。したがって、仮にある結果が特定の原因によって一義的に決定されていなかったとしても、そこに自由意思が関与しているとは仮定しない。

このように見ていくと、両者とも、ある結果が特定の原因によって一義的に決定されることを肯定しているわけではなく、ただそのような事実があるときに、それをどう解釈するのが異なるだけなのかもしれない。つまりいみじくも Bargh が指摘しているように、同じグラス（自由意思のグラス）を見て、一方は十分に満たされていると言い、一方はほとんど空だと言っているに過ぎないとも考えられる。そしてこのような見解の相違は、両者がこれまで行ってきた研究の足跡を考えるなら、当然のことなのかもしれない。

ただ一方で、第三者の視点から彼らの討議を見てみると、両者の意見の相違は、それ以前の前提、すなわち自由意思や無意識を善と見なすか悪と見なすかという、彼らの研究者としての、あるいは人としての価値観に強く根ざしているように見える。Baumeister にとっては自由意思こそが人間を人間たらしめ、豊かな文化を創造する絶対的な善である。それに対し無意識は他の動物にも共有され、原始的な衝動や単純な学習パターンを遂行するものに過ぎない。だから Baumeister は、最近の科学的研究が心理学に限らず、自由意思の存在を否定するものが多数提出されていることに強い危機感を覚え、少なくとも現状では「自由意思が存在しない」ことは既定の事実ではないこと、そして自由意思の存在を完全に否定することはおそらく原理上不可能であることを強調する。このような Baumeister の考えは、決して特殊なものではない。無意識的過程は、確かに効率性がよく、特別な認知的資源を必要とせずとも、瞬時に反応を導き出すことができるけれども、その反応は原始的、固定的で、柔軟性がないため、複雑で合理的な判断をするには不向きだし、時に深刻なエラーをもたらし愚か（dumb）な過程であるという考えは、これまでも多くの研究者に受け入れられてきた（e. g. Loftus, & Klinger, 1992）。しかし、Bargh はそのような前提には立たない。むしろ、無意識に大きな可能性を見出しており、無意識を柔軟で洗練された過程だと考える。したがって、人間に特有と思われるような高次の心的機能であっても無意識的過程が担うことができるし、無意識的過程の働きによって、複雑な状況にも相応しい反応が自然と発現すると考える。

興味深いのは、Baumeister も Bargh も、自身の見解の説明に「進化（evolution）」ということばを使用していることである。近年、心理学においては、我々のような現代の人間が有する心の機能も、進化の過程の中で自然選択されてきたものとしてとらえる進化心理学的な考え方が一般的になっている。Baumeister や Bargh もそのような流れの中で、自身の主張を展開し

ていると言える。しかしBaumeisterが、自由意思こそが進化的適応の産物であり、それにより自己制御と理性的な選択ができるようになったことで、人間は原始的な衝動に基づく反応や単純な学習パターンの反復からの自由を手に入れたと主張するのに対し、Barghは無意識的過程こそが進化的適応の産物だと考える。Barghは、人間以外の生物においては、たとえ非常に複雑で知的な反応が見られたとしても、それは意識的な過程によって導かれたとは仮定されず、むしろ進化の過程の中で自然選択されてきた反応と見なされるのに、なぜ人間の場合のみ、複雑で知的な反応はすべて、最初から自由意思や意識的過程の産物だと考えるのかと疑問を呈す。

Barghはさらに最近、別の場所で、意思さえも自動化された無意識的過程（自動化された意思：automated will）である可能性を指摘している（Bargh, Gollwitzer, Lee-Chai, Barndollar, & Troetschel, 2001）。Barghがこうした考えを持つのは、実は彼は、無意識的過程を、単にヒトが生物として祖先から継承したものというだけでなく、成長の過程でダイナミックに変化する過程ととらえていることに由来しているのではないと思われる。Barghは、行為主が自分では自由意思に基づいて行った判断や行動だと思っていたものが、たとえ実際には自由なものではなかったとしても（すなわち、その行動を引き起こす原因が他所にあったとしても）、それは「遺伝的に継承されたものと、幼少期に吸収した文化的規範や価値観と、個人の人生経験の合流点」（Bargh & Earp, 2009a, 2009b）だと主張している。すなわち、無意識的過程は、すべての人間（ヒト）が進化的適応において必要とされた動機や選好を基盤としつつも、その人が成長の過程で出合うさまざまな環境や、そこでの経験によって、その人なりのものにカスタマイズされていくものと、Barghは考えているのである。したがって、Barghにとっては、仮に自由意思の存在が幻想だったとしても、それは依然として、その人の“意思”であり、それぞれの意思はその人固有のものだということになる。

以上のように、BaumeisterとBarghの自由意思ならびに無意識的過程のとらえ方は、その前提からして、まったく異なっており、結局のところ、両者の討論は最後までかみ合っていなかったと言える。ただ、公開で行われた両者の議論は、それを見守る社会心理学者に自由意思の問題を再考するきっかけを与えてくれたし、二人の議論は一旦は終結したものの、これを契機にした他の研究者たちの議論はいまなお続いている。現状では、圧倒的な勢いで論文を産出し続けてきたBarghたちのグループにやや分があるように見えるが、最近になって彼らの研究に疑問を投げかける論考も目立つようになってきた<sup>6</sup>。また、Baumeisterらも猛反撃を仕掛けている。いずれにせよ、冒頭でも示したように、社会心理学において自由意思をめぐる問題に正面から取り組まれるようになったのは、まだ最近のことである。しばらくは動向を注視する必要がある

ように思われる。

## 注

- 1 Barghはそのような表現を用いていないが、この分野でよく使われる表現を使うなら、ここでいう“魂”は“ホムンクルス”と言い換えても良いだろう。
- 2 これはいわゆる悪魔の証明である。
- 3 Barghをはじめとし、自由意思の存在を否定する者は、決定論の否定と因果性の否定とを混同していると、Baumeisterは考えている。
- 4 意識は随伴現象に過ぎず、実際に何らかの効力を持つ自由意思というものは存在しないとするFrancis Crick (1991)の“The Astonishing Hypothesis”の一節を使用した（実験1）。
- 5 Barghのこのような主張に対しBaumeisterは、自由意思への信念は、自己ではなく、むしろ社会集団に奉仕するものであり、それによって社会システムが円滑かつ効果的に機能することに寄与してきたし、反対に、こうした信念が人の振る舞いをよくするからこそ、文化がこのような信念を支えてきたのだと反論している。
- 6 最近、Barghらが行ってきた社会的プライミングの実験の再現可能性が低いことが議論的になっており（e. g., Bower, 2012; Doyen, Klein, Pichon, Cleere-mans, 2012; Yong, 2012）、それらの実験を根拠にしたBarghの主張の一部に意義を唱える風潮も現れている。一方で、Bargh自身は、社会的プライミングの結果は十分に再現性があるものだと反論している（Bargh, 2012）。

## 引用文献

- Baer, J., Kaufmann, J., & Baumeister, R. F. (Eds.) (2008). *Are We Free?: Psychology and Free Will*. New York: Oxford University Press.
- Bargh, J. A. (1997). Reply to the commentaries. In R. S. Wyer, Jr. (ed.), *Advances in social cognition: The automaticity of everyday life (vol. 10)*. Mahwah, NJ: Erlbaum. Pp.231-246
- Bargh, J. A. (2008). Free will is un-natural. In J. Baer, J. Kaufman, and R. Baumeister (eds.), *Are We Free?: Psychology and Free Will*. New York: Oxford University. Pp.128-154.
- Bargh, J. A. (2009). New study: TV food ads provoke automatic eating in adults as well as children: One reason the public needs to know about limits to their free will. *Psychology Today Online*. Published on July 21, 2009.  
<http://www.psychologytoday.com/blog/the-natural-unconscious/200907/new-study-tv-food-ads-provoke-automatic-eating-in-adults-well-ch>.
- Bargh, J. A. (2012). Priming effects replicate just fine, thanks: In response to a ScienceNews article on priming effects in social psychology. *Psychology Today Online*. Published on May 11, 2012.  
<http://www.psychologytoday.com/blog/the-natural-unconscious/201205/priming-effects-replicate-just-fine-thanks>.
- Bargh, J. A. & Earp, B. (2009a). The will is caused, not



- “free”. *Dialogue*, 24, 13&15.
- Bargh, J. A. & Earp, B. (2009b). The will is caused, not “free” : Our belief in free will is mainly self-serving. *Psychology Today Online*. Published on June 23, 2009. <http://www.psychologytoday.com/blog/the-natural-unconscious/200906/the-will-is-caused-not-free>.
- Bargh, J. A., Gollwitzer, P. M., Lee-Chai, A., Barndollar, K., & Trötschel, R. (2001). The automated will : Unconscious activation and pursuit of behavioral goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 1004-1027.
- Bargh, J. A. & Morsella, E. (2008). The unconscious mind. *Perspectives on Psychological Science*, 3, 73-79.
- Baumeister, R. F. (2008a). Free will in scientific psychology. *Perspectives on Psychological Science*, 3, 14-19.
- Baumeister, R. F. (2008b). “Free Will, Consciousness, and Cultural Animals.” In J. Baer, J. Kaufman, and R. Baumeister (eds.), *Are We Free? : Psychology and Free Will*. New York : Oxford University Press. Pp.65-85.
- Baumeister, R. F. (2009a). Just exactly what is determinism. *Psychology Today Online*. Published on February 15, 2009. <http://www.psychologytoday.com/blog/cultural-animal/200902/just-exactly-what-is-determinism-0>.
- Baumeister, R. F. (2009b). Determinism is not just causality : Is the future already set in stone. *Psychology Today Online*. Published on June 23, 2009. <http://www.psychologytoday.com/blog/cultural-animal/200906/determinism-is-not-just-causality>.
- Baumeister, R. F. (2009c). Free will at the Tampa SPSP conference : The great debate. *Psychology Today Online*. Published on June 25, 2009. <http://www.psychologytoday.com/blog/cultural-animal/200906/free-will-the-tampa-spsp-conference-the-great-debate>.
- Baumeister, R. F. (2009d). John Bargh and some misunderstandings about free will. *Psychology Today Online*. Published on June 30, 2009. <http://www.psychologytoday.com/blog/cultural-animal/200906/john-bargh-and-some-misunderstandings-about-free-will>.
- Baumeister, R. F., Masicampo, E. J., & DeWall, C. N. (2009). Prosocial benefits of feeling free : Disbelief in free will increases aggression and reduces helpfulness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 260-268.
- Baumeister, R. F. & Vohs, K. D. (2009). Determinism is not just causality. *Dialogue*, 24, 12&15.
- Bower, B. (2012). The hot and cold of priming : Psychologists are divided on whether unnoticed cues can influence behavior. *ScienceNews*, 181, 26.
- Brehm, J. (1966). *A theory of psychological reactance*. New York : Academic Press.
- Crick, F. (1994). *The astonishing hypothesis*. New York : Scribner's.
- Doyen, S., Klein, O., Pichon, C-L., Cleeremans, A. (2012). Behavioral priming : It's all in the mind, but whose mind? *PLoS ONE* 7(1) : e29081.
- Harris, J., Bargh, J. A., & Brownell, K. (2009). Priming effects of television of food advertising on eating behavior. *Health Psychology*, 28, 404-413.
- 池上知子 (2001). 自動的処理・統制的処理—意識と無意識の社会心理学— 唐沢穰・池上知子・唐沢かおり・大平英樹 (著) 社会的知の心理学—社会を描く心のはたらき— ナカニシヤ出版 Pp.130-151.
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology (vol. 2)*. New York : Henry Holt and Co.
- 唐沢かおり (2012). 社会心理学と科学哲学のコラボレーション 唐沢かおり・戸田山和久 (編) 心と社会を科学する 東京大学出版会 Pp.1-11.
- Libet, B., Gleason, C. A., Wright, E. W. and Pearl, D. K. (1983). Time of conscious intention to act in relation to onset of cerebral activity (readiness potential) : The unconscious initiation of a freely voluntary act. *Brain*, 106, 623-642.
- Linder, D. E., Cooper, J., & Jones, E. E. (1967). Decision freedom as a determinant of the role of incentive magnitude in attitude change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 245-254.
- Loftus, E. F., & Klinger, M. R. (1992). Is the unconscious smart or dumb? *American Psychologist*, 57, 705-717.
- Taylor, S. E. (1989). *Positive illusions : Creative self-deception and the healthy mind*. New York : Basic Books.
- Vohs, K. D. & Schooler, J. W. (2008). The value of believing free will : Encouraging a belief in determinism increases cheating. *Psychological Science*, 19, 49-54.
- Yong, E. (2012). Nobel laureate challenges psychologists to clean up their act : Social-priming research needs “daisy chain” of replication. *Nature*, 11535.

(2012年12月5日受理)